

平常展出品リスト（現代陶芸） 2016年8月13日～11月27日

展示場所	作品名称（よみ） 英語名称	時代	窯/作者	登録番号	Acc.No.	法量（cm）	重量 （g）	備考	図版
新館ロビー	墳形 Mound Form	平成5年 1993	笹山忠保 SASAYAMA Tadayasu	04998	-	h: 18.0 w: 51.0×17.0	-	中村幸男氏寄贈 Gift of Mr. NAKAMURA Yukio	
新館ロビー	傾いた器 Leaning Vessel	平22年 2010	笹山忠保 SASAYAMA Tadayasu	05000	-	h: 24.0 w: 43.0×33.0	-	中村幸男氏寄贈 Gift of Mr. NAKAMURA Yukio	
新館ロビー	WAVE Wave	平21年 2009	笹山忠保 SASAYAMA Tadayasu	04999	-	h: 44.0 w: 30.0×28.0	-	中村幸男氏寄贈 Gift of Mr. NAKAMURA Yukio	
受付ロビー （光の庭）	馬群像	昭和49-58年 1974-1982	鈴木治 SUZUKI Osamu	-	-	(左) h: 57.5 w: 36.0×16.0	-		
受付ロビー （光の庭）	朱夏の月 Summer Moon	昭和57年 1982	鈴木治 SUZUKI Osamu	-	-	h: 36.0 30.0×11.0w:	-		
受付ロビー	Heterophoney2 Heterophoney2	平成20年 2008	秋山陽 AKIYAMA You	03969	34139	h: 205.0	-	匿名氏寄贈 Gift of Mr. anonymity	

笹山忠保

SASAYAMA Tadayasu

ささやまただやす
笹山忠保（1939-）は、窯業の長い歴史をもつ信楽で生まれた。岐阜県立多治見工業高校図案科で学んだ後、信楽の陶器問屋で働きながら、滋賀県立窯業試験場や京都市立工芸指導所でさらに陶芸の技術を磨いた。

この頃に京都を中心に活動する多くの芸術家と交流を深め、八木一夫や鈴木治、山田光など走泥社の同人をはじめとする作家の作品に強く惹かれてゆく。1968年には走泥社展に出品し、以後同人として1986年まで活動することとなる。

若き日の笹山に大きな刺激を与えたこととして、サム・フランシスやロバート・ラウシェンバーグなど、信楽を訪れた米国の芸術家たちとの交流が挙げられる。当初は信楽の特徴とされる「土の技や火の味と情緒」に反発するように、ピンク色の釉薬を用い、またメタリックな結晶釉による幾何学的な造形作品を制作した。ところが1990年に穴窯を築いたことから、造形的な形態と薪窯焼成による偶然性とを取り入れた模索が始まる。この背景には、自らの原点と向き合うよう求めたイサム・ノグチや鈴木治からの助言があったという。最初の成果は「未秘の形態」と題され、陶芸の制作行程において不可避の変化を、意図しないまでも受け入れる姿勢が表れている。

今回の展示作品もいずれも焼締めによるもので、特に《墳形》は、自然釉の変化が原始的な形態と結びつき神秘的な印象を形成する、穴窯での比較的早い時期の制作である。

現代陶芸の表現と信楽という伝統的な窯業地、「オブジェ」とデザインなど、相反するかに思われる分野に身を置いてきた笹山の現在の表現を、昨年度御寄贈頂いた所蔵品からご覧頂きたい。

なお、鈴木治の作品を受付ロビーにて展示中です。併せてご覧ください。